

## 実践報告

## コミュニティ形成を目指した継承語教育クラブの立ち上げ

## —モンゴル・ウランバートルにおける試み—

伊藤頼子・八尾由希子

## キーワード

モンゴル, 継承語教育, コミュニティ形成, 海外児童

## 1. はじめに

日本に背景を持つ子どもたちが、楽しく日本語や日本文化を学ぶことを目的に、保護者が中心となって、2016年9月にモンゴル国ウランバートル市で「モンゴル子ども日本語クラブ」を立ち上げた。その発足の経緯と軌跡を記録し、課題を明らかにすることを本実践報告の目的とする。

## 2. 「モンゴル子ども日本語クラブ」発足の背景

## 2-1 モンゴル在住日本人コミュニティ

モンゴルは、大国ロシアと中国に挟まれた、人口300万人ほどの東アジアの内陸国である。外務省海外在留邦人数調査統計表一覧（外務省，2017）で公表されているデータから、モンゴルの長期滞在日本人数（3か月以上の滞在者で永住者ではない邦人）をたどってみると、約20年前の1997年には169名（外務省，1998）、約10年前の2007年には370名（外務省，2008）、最新データの2017年は535名（外務省，2018）と大幅に増加していることがわかる。また、1997年から「モンゴル日本人会」が、モンゴル在住の日本人の親睦と福祉の増進並びに日本・モンゴル友好親善を図ることを目的に活動している。その登録会員は、現在270名程度であり、その中には援助・国際協力関係者、企業の駐在員、自営業者の他、近年はモンゴル人との国際結婚によって家族でモンゴルに住む日本人も増えている。特に鉱山開発などの発展により、モンゴルが2桁の経済成長率を記録した2011年頃から、モンゴルの首都ウランバートル市内では、日本から輸入された食材や家庭用品を扱う小売店や、ファーストフードやピザのフランチャイズ店舗などが増え、日本人にとって暮らしやすくなってきたことが、国際結婚をした家族が、モンゴルでの生活を選択するひとつの要因になっていると思われる。

増加傾向にあるとはいえ、在留日本人は他国と比較して決して多くはない。そして、その交流の機会もビジネス場面が多く、モンゴル人との国際結婚によってモンゴルに住んでいる者やその家族同士のつながりが持てる機会はごくわずかである。

## 2-2 知日モンゴル人のコミュニティ

一方、現在のモンゴルにおいて、日本語や日本文化の普及は目を見張るものがある。まず、日本語教育についていうと、公的な始まりは社会主義体制下の1975年、モンゴル国立

大学に日本語コースが開設されたことであった。1990年に民主化・市場経済化し、日本との交流が一般にも開かれて以降、モンゴルにおける日本語教育は急速に盛んになっていく。多くの大学で日本語学科が開設されたほか、初等・中等教育機関でも日本語の授業が始まった。国際交流基金の調査(国際交流基金, 2016)によると、日本語学習者数は2015年現在で9,914人、そのうち初等・中等教育機関で学ぶ者が約3分の2を占めている。一方、高等教育機関で学ぶ者は約24%、その他教育機関で学ぶ者は約12%となっている。近年のモンゴルにおける日本語教育状況を概観すると、初等・中等教育機関や大学の授業で日本語学習を始める者以外に、日本滞在経験があり、モンゴルに帰国後改めて日本語を学ぶ者(子どもを含む)、日本のアニメや漫画などを通して日本語を独学する者、技能実習制度のもとで日本へ行くことを希望して日本語を学ぶ者などが増えており、学習者が多様化していると言える。さらにウランバートルだけでなく、地方の学校・大学でも日本語教育が行われるようになってきており、地域的にも広がりを見せている。

日本に住むモンゴル人も増加傾向にある。日本で外国人登録をしているモンゴル人の数は2017年6月現在9,583名(法務省, 2017)である。これは人数としては多くないが、モンゴルの全人口が約300万人であることを考えると、現時点でモンゴル人の約320人に一人が日本に住んでいることになり、少なくない割合であると言える。また、そのうち「留学」の在留資格を持っているモンゴル人は2,909名であり、在日モンゴル人のうちの3分の1程度は留学生であることがわかる。彼らのコミュニティとして「在日モンゴル留学生会」が1996年に設立され、毎年モンゴルのお祭りを東京で開催するなど、安定した活動を展開している<sup>(1)</sup>。また、日本留学を終えてモンゴルに帰国した人たちの「ジュガモの会」が1995年から活動をしている。そのホームページを見るとモンゴル政財界で活躍する人材を日本留学経験者から多く輩出していることがうかがわれる<sup>(2)</sup>。

こうしたことから、ウランバートルの町で暮らしていると、日本語ができるモンゴル人に出会うこともよくある。日本料理店や日本関係のイベントなどで、「日本人の方ですか?」と流ちょうな日本語で話しかけられることも多々あり、日本を知るモンゴル人の多さを実感する。日本を背景に持つ子どもたちが日本語を使って交流している相手は、中にはこうして日本留学する親に同行して日本で数年間を過ごしてきた帰国子女であることも少なくない。

### 2-3 モンゴル在住日本人と日本在住モンゴル人の母語教育・継承語教育

まず、モンゴルにおける母語教育、継承語教育の状況について述べる。モンゴルが民主化し、日本を含めた資本主義国家との交流を活発化させた1990年代から、モンゴルにおける外国語学習者が増え、民間レベルでの人的交流も盛んになってきた。母語教育・継承語教育という観点では、モンゴル人の親は、子どもに外国語や外国の文化を身につけさせることに意欲的な姿勢が強かったことから、母語教育・継承語教育に関する積極的な活動は行われていなかったようである。親の就学・就職等に伴い、外国で暮らすモンゴル人の子どもに対するモンゴル語母語教育は、まず韓国で、モンゴルからの出稼ぎ労働者の子弟が十分な教育を受けられないまま放置されていることを憂慮した韓国側の人道的支援から始められた。韓国語の他、モンゴルから教師を派遣し、モンゴル語や民族音楽や民族舞踊も教えている。アメリカ、ドイツ等でも90年代後半から2000年代初頭にかけてモンゴル人

の手による母語教育が始められていた。日本在住モンゴル人の子弟に対するモンゴル語母語教育は、2015年に始められた「Minii Mongol Surguuli Tokyo<sup>(3)</sup>」が初めてであろう<sup>(4)</sup>。ここでは幼児・児童を対象に、週末にモンゴル語やモンゴル文化を学ぶカリキュラムが組まれている。

一方、モンゴル在住日本人も前述のように増加傾向にあるが、日本人学校、補習授業校などは存在しない。その背景には、モンゴルには日系企業の数が少なく、数少ない駐在員も冬の寒さ、大気汚染、日本人学校や補習校がないことから、子弟を連れて来ることに躊躇するという事情がある。2005年頃から、モンゴル人・日本人間の国際結婚によってモンゴルに住んでいる親たちから日本人学校や補習校を希望する声も聞かれたが、該当する子弟が少ないことから、諦めざるをえなかった。日本人の子どもが集まる特定の学校や塾などもなく、個人的な交流を越えた子育てネットワークも構築されていなかった。

#### 2-4 「モンゴル子ども日本語クラブ」の発足

前述のように、1990年代以降、モンゴル、特にウランバートルにおいて日本語ができるモンゴル人は確実に増えている。彼らがお互いに交流したり情報交換をしたりする場もある。その一方で、モンゴルに暮らす日本人を親に持つ子どもたちは孤立していると言えるだろう。ウランバートル市内には4、5校のインターナショナルスクールの他、トルコ、ドイツ、韓国、日本、中国などの教育システムを取り入れ、当該国の言語学習もカリキュラムに組み込まれている私立学校もある。モンゴルに暮らす外国人子女の家族は、それぞれ家庭の教育方針や経済状況、モンゴル語の理解度やモンゴル社会への浸透度、滞在予定年数、通いやすさなどの条件から学校を選択するため、日本人の親を持つ子ども同士が同じ学校に通うことは稀である。従って日本に背景を持つ子どもたちの多くは、現地校もしくはインターナショナルスクールに通いながら、家族以外の日本語を使う同世代の子どもたちとの交流は学校内ではほとんどなく、日本人の親たちからは何らかの交流の場の設立が待ち望まれていた。

子どもたちのみならずその親も、教育・医療・行政制度などの問題が多々あり、日本人の親同士の情報交換や助け合いが必要な場面に直面する。そのような場合に頼りになるのは日本語で話せる同じ立場の人であることは当然のことであろう。そのような必要性から、SNSなどを通じた個人的な小さな付き合いから始まり、自然発生的に、モンゴル人と結婚した日本人と子どもたちを中心に輪ができ、その輪が一部で重なったり、広がったりしていった過程が、一般的に、モンゴルで生活する日本人と子供たちがコミュニティーを形成する原点となった。

2年ほど前まで、日本人の親のほとんどは、日本人学校、または補習校を作ることのみがモンゴル在住日本人の子弟にとっての日本語教育手段であり、人数不足でそれが不可能である以上、それぞれが家庭で日本語教育に取り組むしかないと考えていた。しかし、2016年夏にウランバートルに滞在していたプリンス頓日本語学校理事長のカルダー淑子氏より、保護者が自らの手で子どもたちに必要な日本語教育を行う場を作っている国や地域が世界中にたくさんあることと、継承語教育という概念を伺う機会を得たことをきっかけに、筆者らに子ども日本語クラブを作りたいという志が芽生えた。親の国際結婚によってモンゴルに生活拠点を置き、近い将来日本で義務教育を受けることを想定していない子どもが

多いウランバートルでも、継承語としての日本語を子どもたちに学ばせる機会があつていいのだということに目が開かれ、2016年9月から「モンゴル子ども日本語クラブ」がスタートすることになった。

### 3. 「モンゴル子ども日本語クラブ」の概要

#### 3-1 目的

第2章で述べたような背景から、「モンゴル子ども日本語クラブ」(以下、「クラブ」とする)は、日本を背景に持つ子どもを中心に、保護者やその他のモンゴル在住日本人を対象としたコミュニティーを作ることを目的とすることにした。このコミュニティーで重視されることは次の3点である。

1) 日本語での交流を通して、子どもたちが日本の年中行事や教科の知識の学習だけにとどまらず、日本社会でのことばの使い分けややりとりの仕方など広い意味での日本文化や日本語を学べること。

2) 同じ立場の子どもたちとの交流を通して、子どもたちがアイデンティティーや自尊心を育むことができること。

3) 子どもたちの学びを見守り、サポートしていく立場の保護者や教師、ボランティアの日本人同士の情報交換と自己実現ができる場であること。

#### 3-2 参加者

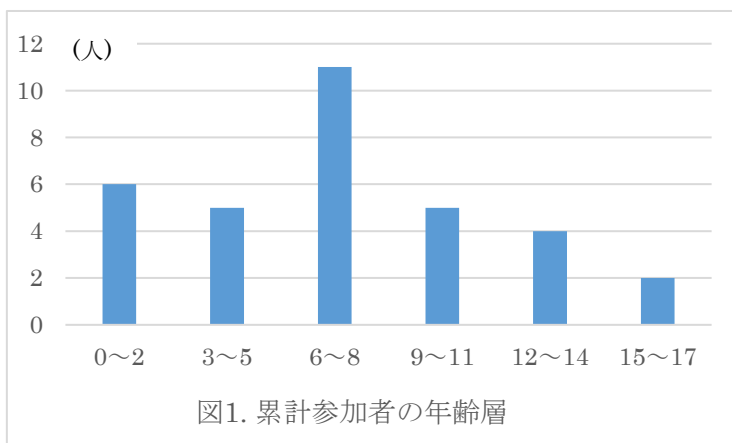
クラブの立ち上げは2-4で述べたとおり、主に国際結婚によってモンゴルに住んでいる日本人の母親たちによって行われた。自分の子どもたちのために継承語としての日本語や日本文化を体験する機会を作りたいという希望が集まった形である。しかし、モンゴル在住の年数、子どもの人数や年齢、将来の展望(この先何年モンゴルに住むか、日本での進学を考えているかなど)は異なり、子どもの日本語教育に求める濃度には差があった。「継承語」という概念も保護者全体に理解を得ているわけではなかった。保護者にとっては、日本とモンゴルの二つの背景の中で複数の言語を使い分ける環境で育つ子どもを理解するのは難しい、自分と同じような過程で日本語(もしくはモンゴル語)を習得するのではない、というのは子育て経験から感じられる共通認識だが、では何をどうやって習得していくのかという点においてはよく分からない者同士だった。筆者らも、モンゴルで日本語教師として働いていたが、継承語教育に関しては何の知識も経験もなく、手探りでスタートとなった。そこでまず、クラブ開始にあたって保護者アンケートを実施し、参加希望者の実態を把握することにした。アンケートでは、①クラブ開催を希望する曜日、回数②クラブの会費の希望③クラブの会場の希望④子どもの日本語レベルの現状⑤子どもの日本語の到達希望レベル⑥日本語学習以外にどんな活動を希望するか、を自由回答形式で質問した。本稿では特に⑤⑥における回答を紹介する。

子どもの日本語レベルに関して希望する到達レベルには、「帰省したときに日本の祖父母と意思疎通ができること」「年齢相当の会話ができること」「小学校程度の漢字が書けること」「中学校程度の文が読めること」「日本語能力試験N〇に合格すること」「日本の高校・大学に帰国子女枠で入学できること」などさまざまな希望が述べられていた。

また、日本語学習以外にどんな活動がしたいかという質問には、「同年代の子どもたちと

の日本語でやりとりできる遊び」「体験や実験」「体を動かす遊び」「季節感のある行事」などの回答が見られた。これは、冬が長いモンゴルではのびのび体を動かす機会が少ないこと、モンゴルの学校では理科の実験や工作などの授業が少ないことなどから、このような希望が見られたのだと考えられる。この意見は年間を通じてのプログラム作成に活かされている。

次に、実際のクラブ参加者を概観する。2016年9月から2017年12月までの1年4か月のクラブ参加者の累計は15家族33人であった。累計参加者を年齢別に見ると、6～8歳が最も多かった(図1)。乳幼児の参加は、兄弟の上の子がクラブに参加する際に親に連れられてくる形で始められ、年齢が上がるに従って参加できるプログラムから参加するようにしている。中学生以上の子どもはイベント時のみ参加することはあるが、毎回継続して参加することはない。現在は園児から小学生の年齢層が多く、継続率も高い。1年4か月の間に一度でもクラブに参加した15家族の家族構成は、父親がモンゴル人・母親が日本人の家庭は9家族、父親が日本人・母親がモンゴル人の家庭は4家族、両親ともに日本人の家庭が2家族である。



クラブ開始時に問題になったのは、モンゴル人の受け入れである。クラブの対象者は「日本に背景を持つ子どもたち」としているが、国籍などの定義はしていない。2-2で述べた通り、親の留学や就業に

より数年日本で生活して帰国したモンゴル人の子どもたちの家族が「せっかく学んだ日本語を忘れたくない」「日本の幼稚園・小学校で育ったから日本の子どもと遊びたい」「将来日本に留学したい」「日本のアニメやゲームの話がしたい」などの理由からクラブ参加を希望するケースがあった。そのような子どもの受け入れをどうするかは、クラブのルールを決める上での課題となった。長年日本に住んだモンゴル人子弟の中には、モンゴルに住んでいる日本人子弟よりも日本語での会話がスムーズで、たくさんの漢字が書ける子もいる。またモンゴル人が日本人と結婚して、連れ子が日本人の家族になるケースや、日本人と離婚したモンゴル人の親が子どもをモンゴルに連れ帰ってくるケースなどもある。多様な背景を理解しつつ、クラブの目的を見失わないためにどうすればいいのかという保護者間の話し合いを経て、その子どもにとって日本語が継承語であると言えること、「楽しく日本語日本文化を学ぶ」という目的を持つクラブを保護者も一緒に作り上げていけることの二つの条件を設け、現時点では基本的には「両親またはどちらかの親が日本人であること」とし、それ以外の参加希望者には個別に対応するようにしている。クラブの案内や告知は口コミで行われることが多く、特に宣伝などは実施していない。

### 3-3 場所と時間

保護者の希望するクラブ実施場所の条件は、行きやすい場所にあること、安全性が確保

されていること、トイレや手洗い場などの衛生設備が使いやすいことの3点であった。この3点からウランバートル市内中心部にある「モンゴル日本人材開発センター<sup>⑤</sup>」が第一候補に挙げられた。同センターは駐車場が完備され、警備員が常駐し、清潔で使いやすいトイレがある。さらに、スタッフは日本語対応ができること、比較的安い料金で部屋を借りられること（「在モンゴル日本人会」の協賛を得て、通常の賃料の半額で借りている）、半年ほど先まで安定して会場予約を入れられることなどの利点が多かった。また、「モンゴル日本人材開発センター」の設立の趣旨がモンゴルと日本の懸け橋となる人材の開発であることから、クラブの趣旨に理解をいただき、会場使用をするうえで様々な支援を受けている。問題としては、隣の部屋で別団体による会議や試験などが行われることがあり、子どもの声や音楽がうるさいと苦情が入ることがあったことである。事前に把握できるときにはプログラムを変更したり、廊下で保護者が注意をしたりして対処した。

小学校高学年以上の子どもを持つ保護者からは、学習塾のように週2回ほどの高い頻度での開催を望む声も聞かれたが、ボランティアでの運営負担を考え、月2回の土曜日午前10:30-12:30の2時間で開催することとした。モンゴルの小中高校、大学の夏休みが6～8月の3か月あり、その期間は帰国したり旅行したりする家族も多いことから、夏休みの3か月間は休みとした。また、モンゴルの教育暦に合わせて9月始まりの5月修了とした。各国の日本語補習校や日本語クラブを見ると日本の教育暦に合わせて4月始まりの3月終わりにしているところが多いが、夏休みが長いこと、学習支援をお願いしている日本人留学生たちがモンゴルの教育暦に合わせてモンゴルに来て、日本に帰ることなどから、モンゴルの教育暦に合わせた活動をしている。

### 3-4 運営（ボランティア、教師、会費）

運営費は、会計担当の保護者が2名、毎回の参加者から会費を徴収している。月謝制にする案もあったが、メンバーの流動性が高いことや、初めての参加者や非継続的な参加者でも気楽に参加できるようにという配慮から、毎回会費を徴収するようにしている。

会費は、飲食が伴うイベント（クリスマス会、修了式、料理作り）のときには子ども一人ずつの会費を集めるが、通常は参加家族単位で会費を集めている。初めの1年は集まった家族数によって一律10,000～20,000トゥグルグ<sup>⑥</sup>を集めていたが、2年目からは不公平感を解消するために、子ども1人の参加家族からは15,000トゥグルグ、子ども2人以上の参加家族からは20,000トゥグルグと3段階に会費を設定した。会費は、教師への謝礼と会場賃貸料、雑費（工作の材料、資料のコピー、筆記用具など）に使われている。

会計や連絡、会場予約、写真撮影などは保護者が分担してボランティアで行っている。特別なイベントの際には担当者を立て、買い物などの事前準備をしている。学習支援をする教師は、1年間のプログラムでモンゴルに留学してくる日本人大学生に依頼していたが、2年目はモンゴルの小学校で日本語を教えている幼稚園教諭・小学校教諭の資格を持つ日本人の方にも依頼している。教師の方々は、本来のモンゴル滞在目的があり、別の用事が入ったときはクラブに来られないこともある。またモンゴル滞在期間も短期なので、継続して協力をお願いするのは難しいが、親とは異なる世代の日本人のお兄さん、お姉さんとの交流を子どもたちは楽しんでいるので、可能な限り継続を依頼しており、留学生が帰国する際には、次年度の留学生に紹介してくれるよう依頼している。また、特別講師として、

医療・保健分野で派遣されている JICA 青年海外協力隊隊員に歯みがき指導をしていただいたり，元幼稚園教諭のボランティアに絵本の読み聞かせをしていただいたり，モンゴルにいるさまざまな方の力を借りて，モンゴルで成長している子どもたちを見守るコミュニティーを形成している。

#### 4. 「モンゴル子ども日本語クラブ」の活動内容

##### 4-1 活動時間割

クラブの活動時間は月2回土曜日午前 10:30-12:30 の2時間である。そのうち1時間は「学習時間」，残りの1時間は「交流・活動の時間」としている。

「学習時間」は保護者が子どもの学習計画を立て，各自の能力や目標に沿った教材を日本語教育や幼児教育の専門家の意見を参考に親子で準備した。教材はそれぞれインターネットからフリーダウンロードできるプリントや個人で購入した問題集を使っている。1年目は学習時間を設けておらず，文化体験と遊び中心のプログラムを組んでいたが，保護者から，

家庭での学習は親の負担が重く，親子双方にとってのストレスとなっているので，親以外の先生の指導の元，他の子どもたちと一緒に日本語学習に取り組む時間をクラブで持ちたいとの要望が挙がるようになった。そこで2年目から前半1時間を学習時間とし，後半1時間を交流・活動の時間とする計画を立てた。

学習時間におけるクラス分けは，年齢・学齢別にするか，日本語レベル別にするかで，保護者間で慎重な話し合いがなされた。3-2で述べたとおり，保護者が子どもに求める日本語到達レベルには差があり，年齢・学齢別では同じレベルの学習に取り組むことはできない。また，現在の日本語レベル別になると，大きい子どもが小さい子どもと一緒にひらがな学習に取り組むことを強制することになり，子どもの自尊心を傷つけることになる。その話し合いの中で，①子どもが日本語に興味を持ち，達成感を得ることができること，②いろいろな年齢の子どもたちが，いろいろな目標に取り組むことを許容しあえること，の二つがクラブの前提であることを保護者が確認し，子どもたちと先生にも共有した。この前提を基に，ゆるやかな目標レベルによる3つのクラス分けをすることを決めた。「ほし組」は文字学習スタート前の子ども，「つき組」はひらがな・カタカナの習得を目標とする子ども，「たいよう組」は文を読んだり，書いたりできることを目標とする子どもを対象とした。このクラス分けは流動的なもので，「いつもはつき組だけど，今日は漢字をやりたいからたいよう組に行く」，「前はほし組だったけど，今日はひらがなに挑戦したいからつき組に行く」というような子どもの要望を受け入れている。教師の人数や子どもの人数によって，2つのグループを合併させたり，分割させたりすることもある。



写真1：学習時間の様子



写真2：交流・活動でのけんだま体験

「交流・活動の時間」は季節感のある内容で、家族内ではできない集団での遊びや工作、歌など、体を動かして、子ども同士が触れ合いながら日本語を使える年間活動計画を、保護者が考えている。また、毎回初めに保護者も含めた全員でラジオ体操をすることにし、最初と最後の挨拶を徹底した。

#### 4-2 活動テーマ

ここで、2016年9月の第1回から2018年1月の第25回までにクラブで実施した交流・活動時間のテーマと内容を報告する(表1)。日本語のレベルや年齢に関わらず、季節感のある日本の文化が体験できるような内容を保護者が話し合っ決めて、先生方に準備を依頼している。

表1 活動テーマと内容

回	年	月	日	テーマ	内容
1	2016	9	3	なかよくなるろう	おりがみ, かるた, トランプ, ゲーム
2	2016	9	17	敬老の日	日本のおじいちゃん・おばあちゃんに手紙を書く
3	2016	10	1	秋の工作	落ち葉でマントとかんむりを作る
4	2016	10	15	日本の地理, 日本の遊び	日本地図と家族の出身地, 花いちもんめ, ハンカチ落とし
5	2016	11	5	体を動かす遊び, ありがとうを伝える	感謝を伝える手紙を書く, いすとりゲーム, 雪遊び
6	2016	11	19	文字に親しむ	ひらがな・カタカナ・漢字ゲーム, しりとり
7	2016	12	3	本を読む	お気に入りの本を読みあう
8	2016	12	17	クリスマス会	プレゼント交換, ゲーム, 飲食
9	2017	1	21	お正月	書初め, お正月の遊び
10	2017	2	11	節分・建国記念日	豆まき, 日本とモンゴルの国歌を歌う
11	2017	3	4	防災	地震の体験談を聞く, 災害時の対応を知る
12	2017	3	25	春	春の歌を歌う, 春の工作をする
13	2017	4	8	保健衛生	歯磨き・手洗い指導を受ける
14	2017	4	22	子どもの日	こいのぼりを作る
15	2017	5	6	修了式準備	メダルや賞状を作る
16	2017	5	13	修了式	
17	2017	9	9	敬老の日	日本のおじいちゃん・おばあちゃんに手紙を書く
18	2017	9	23	秋	秋の歌を歌う, 秋の工作をする



19	2017	10	14	スポーツ大会	運動会
20	2017	10	28	読書の秋	読み聞かせ, 自分のおすすめの本を紹介する
21	2017	11	11	お料理教室	友だちと協力しておにぎりなどを作って食べる
22	2017	11	18	クリスマス会の準備	飾りやカードを作る
23	2017	12	9	クリスマス会	プレゼント交換, ゲーム, 飲食
24	2017	12	16	お正月	かるた, 福笑い, すごろく, けんだま
25	2018	1	27	日本の伝統文化	かるたを作ろう, 遊ぼう

#### 4-3 実践事例報告: 「かるたを作ろう, 遊ぼう」

実践事例として, 直近の活動である2018年1月27日(土曜日)に行われた第25回の活動内容を報告する。

この日の参加人数は8家族15名(男児14名・女児1名)であった。ほとんどの学校が冬休み期間ということもあり, やや少なかった。教師も体調不良や日本への帰国のために少なく, 通常3~5名のところ, 2名(日本人留学生1名・日本人日本語教師1名)だった。会費は15,000トウグルグ×2家族, 20,000トウグルグ×6家族で, この中から会場費, 教師への謝礼を支払い, 残金は繰り越した。

この日の交流・活動の時間は「日本の伝統文化」というテーマでかるたを作って遊んだ。前回(2018年12月16日の回)参加した子どもは, お正月遊び体験の中で, 自分の家からお気に入りのかるたを持ってきて遊んだが, 自分で作るのは初めての体験で, 楽しみにしていた。表2に実施内容と教師・筆者らが気づいた子どもの様子を記載した。

表2: 実施内容

時間	内容	子どもの様子, 気づいたこと
10:20	準備(机と椅子, コンピュータとプロジェクターの設定, 名札)	コンピュータが得意なM(12歳)が教師の代わりに設定をしてくれる。教師に感心されてうれしそうにしていた。
10:30	点呼・あいさつ	教師が少なかったので準備が慌ただしく, 開始時間が遅れたため, 点呼なし。
10:40	ラジオ体操	保護者・先生も含め, 全員体操をした。
10:45	学習	
	① たいよう組「読解」	答えは正しくても, 「なぜですか」という問題に答える文の最後に「~だから。」をつけたり, 本文に書いてあることを箇条書きにまとめたりすることが難しい。分からない言葉や表現を, 仲間と話し合っ解決しようとする態度が見られた。 会話例:

		<p>A:「納屋って何？」                  B:「えー、『納豆』の『な』に、『本屋』の『屋』だから、納豆屋じゃない？」                  A:「そんなの見たことないよ(笑)」                  C:「ここ(文)に『納屋からまきを持ってくる』って書いてあるから、ちがうんじゃない？」                  B:「まきってなんだっけ？」                  C:「モンゴル語で түлээ でしょう？」                  A:「じゃあ、物置じゃない？」…</p>
	② ほし組「文字」	<p>T(5歳) 小さい「つ」がどこに入るのかという問題で、「はらっぱ」、「かけっこ」という言葉は使ったことがないらしく、分からない顔をしていた。                  B(5歳) 助詞の「へ」「を」に苦勞する。                  M(12歳) 漢字の勉強の方が楽しいらしく、1年生の漢字ドリル(曜日の漢字)をやっていた。</p>
	③ つき組「曲線を書く」	<p>T(4歳) 曲線のスタート地点を確認しないで書いてしまうので、教師が声をかけていた。                  H(4歳) 張り切ってスタートが早かったため、飽きてしまった。未就学児には1時間の勉強時間は長いので、飽きないための工夫が必要。</p>
11:30	休憩	<p>給水器があるので、コップか水筒を持ってくるといい。教師が声をかけてトイレに行かせる。</p>
11:40	交流・活動	
11:40	かるたを作ろう	<p>1人3~4文字作成。早い子は10分ぐらいで完成する。M(10歳)は国語辞典を持ってきていて、言葉を調べながら作っていた。</p>
12:15	かるたで遊ぼう	<p>最年長のB(12歳)が読み手になり、1回目は全員で遊んだ。2回目は教師の提案で1回目に3枚以下しか取れなかった子どもだけで遊んだ。自分や自分の兄弟が作った札には愛着があって、取りたがっていた。</p>
12:30	あいさつ・片づけ	<p>かるたはそれぞれ自分が作った札を持って帰った。もう2度と遊べない幻のかるたとなってしまった。</p>

以下に子どもたちがこの日に作成したかるたの一部を紹介する。

① つき組(2名)

T(4歳)は自分で言葉を決めて、保護者に書いてもらった。H(3歳)は字のお手本を教師に書いてもらって、それを自分で真似して書いた。

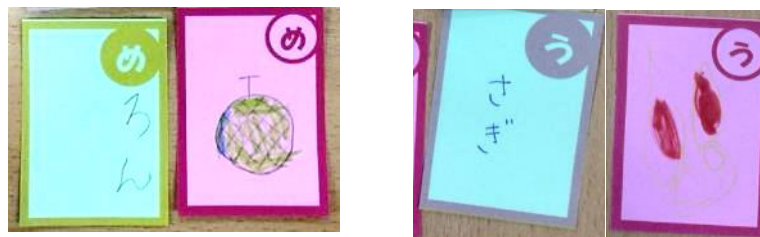


写真3：つき組の子どもが作成したかるたの例

②ほし組（9名）

5歳のTとBは教師や保護者にひらがなを聞きながら一字一字ていねいに書いていた。自分の好きなものや生活に関連した語彙を使っていた。「にんじんあかいくて(→あかくて)かわいい」、「もと(→もつと)おにぎりがあるよ」は、教師に指摘されて直した。



写真4：ほし組の子どもが作成したかるたの例

③たいよう組（4名）

文に工夫をこらし、ことわざやだじゃれ、実体験、最近新しく覚えた言葉などを使って、おもしろい作品を作ろうと時間をかけて考えていた。漢字を読むことはできても、使うのは難しい子どもが多く、ひらがなでの表記が目立った。



写真5：たいよう組の子どもが作成したかるたの例

(左から「じごくにほとけ」「ついでーのおんなのこ」「せみがなく モンゴルではありえない」)

#### 4-4 成果・感想

2016年9月から約1年半、親しくない子どもや保護者、教師とは距離をとりがちな子ども、日本語がなかなか出てこなくて消極的な子どもも最初はいた。掴みあいをしたり、授業中に脱走したりする子どもも少なくなかった。しかし、1年半を経た今では子どもたちは、一緒にゲームをしたり、グループで学習をしたりするうちに、この場にいることを楽しめるようになってきている。クラブの日、子どもたちが教室に向かって笑顔で駆け込んでくる。事前に準備をしている教師や保護者のお手伝いを申し出る子どももいれば、2週間ぶりに会う友だちといっしょにホワイトボードに絵を描き始める子どももいる。大きい子は小さい子の世話をし、助け合う。「新しいめがねだね」「背が伸びたんじゃない?」「髪、切ったんだね」と変化を指摘しあう。そのような姿を見ていると、求めていた子どもたちの学びの場の一つの形ができつつあるように感じる。「家庭でも日本語や日本文化に興味を持つようになった」「毎回喜んでクラブに参加している」「異なる年齢の子どもたちと遊べるようになった」といった保護者の声もそれを表しているだろう。

日本語の上達に関しては、2年目から取り入れた「学習」の時間が役に立っているようだ。2週間に1時間程度とはいえ、中には家庭学習と組み合わせながら進める者もいて、それぞれの目標に向かって着実に上達している様子が授業からも保護者の声からもうかがえる。また、「交流・活動」の時間で家庭ではできない集団遊び、年中行事などを扱っていることも保護者からは高く評価されている。この時間は、長い冬の間、屋外で思いきり遊ぶことが少ない子どもたちに体を動かす機会、座学の授業が多いモンゴルの学校のやり方から離れて実際にものを触る、何かを作るという体験を与えることも重視している。この活動を通して、子どもたちは知識の獲得だけではなく、仲間同士でできないことを助け合ったり、同じ目的に向かって力を合わせたり、様々な背景を持つ人を尊重する体験もできているのではないだろうか。

さらに、日本人教師に教えてもらうということも子どもたちにとっては有益な機会になっている。日本人とモンゴル人では子どもに対する教え方、接し方も違うようで、普段、モンゴル人の先生に慣れている子どもたちにとってはこれが新鮮で楽しいらしい。「日本人の先生はよくほめてくれるから嬉しい」という声も聞かれる。また、教師の指導だけでなく、仲間からの刺激も大きいだろう。「親が家庭で教えると怒ってばかりで学習が進まないが、クラブでは自発的ががんばっている」という保護者の声を聞いたが、これは集団で学習することのいちばんの利点であろう。

保護者同士のつながりも忘れてはならない。保護者がそれぞれできることを分担し、運営に関わることで知らない者同士だった関係が近くなってきた。すると、自分の子どもだけではなく、クラブに参加している子どもたち全員が見守る対象であるという意識がそれぞれに芽生えてきたような気がする。そのような意識を共有しながら、それぞれが持つ焦りや悩みを分かち合い、子どもたちの成長を確認しあい、相談できる場としても、クラブの活動は必要であろう。

こうして、子どもたち、保護者、教師という三者の関わり合いは少しずつではあるが密になってきており、当初目指してきたコミュニティ形成の下地ができつつあるといえるだろう。加えて、保護者以外の様々な人々・機関からの協力も得ている。協賛団体である在モンゴル日本人会、会場を提供してくれているモンゴル日本人材開発センターをはじめ、ボランティアで教師役を引き受けたり、運営や学習上のアドバイスをくれたりしている在留日本人もいれば、会場使用を快く許可してくれた現地の学校もあった。このように、ごく小規模とはいえ、クラブ自身がモンゴルで外の社会との関わり合いを持ちながら一つのコミュニティとして育ちつつあると言える。

## 5. まとめと今後の課題

以上のように試行錯誤を繰り返しながら続けてきた当クラブであるが、最後に今後解決していかなければならない課題として次の2点を挙げておく。

まず、参加する子どもたちの多様性への対応である。子どもたちには多様な背景と日本語学習目的があり、単に年齢に応じたレベル分けは難しい。一方で、子どもたちの保護者は日本の学校教育における年齢・学年に応じた学習内容を求めることもある。子どもたち自身も近い年齢の者同士でできること、できないことを比べ合うのは自然のことであろう。参加者の多様性を受容し尊重しつつ、いかにそれぞれの希望や目標、そして能力に応じた満足度の高い活動を継続・発展させていくべきか、検討しなければならない。そのためには、教師と保護者が相互によくコミュニケーションをとり、子ども一人一人のできることに、子ども自身ができるようになりたいこと、保護者が子どもにできるようになってほしいことを把握することが重要である。そして、互いに緊密な連携を図りながら子どもたちを見守っていく必要があるだろう。



写真6：自作かるたで遊ぶ子どもたち

次に、運営の安定性の問題がある。現在、主に教師を担当しているのは一年間のプログラムで日本からやってくる交換留学生であるため、毎年教師が入れ替わることになる。教師だけでなく、子どもたちと保護者のモンゴル滞在期間も様々な事情によって異なる。このように学習者、教師、運営担当者である保護者の入れ替わりが頻繁にあっても、参加する子どもたちが効果的に学べる安定したクラブ運営ができることを目指し、体制作

りを急がなければならないだろう。

将来的にはモンゴルに補習校を設立することを視野に入れながら、まず第一歩を踏み出した「モンゴル子ども日本語クラブ」の一年半は、運営業務の分担・引継ぎ、収入の安定化、参加する子どもに応じた学習内容の検討、教師の位置付けや意思疎通の方法など、細かくみれば改善していかなければならない点が多い。しかし、教師、保護者といった実際の参加者だけでなく、コミュニティーの様々な力も借りながら、今後も活動を進めていきたいと願っている。

#### 【注】

- (1) 在日モンゴル留学生会ホームページ <http://yamoh.org/> 2018年1月26日アクセス
- (2) ジュガモの会ホームページ <http://jugamo.mn/> 2018年1月26日アクセス
- (3) 直訳すると「私のモンゴル学校・東京」という意味である。
- (4) Minii Mongol Surguuli <https://www.facebook.com/miniimongoltokyo/> 2018年1月26日アクセス
- (5) モンゴル日本人材開発センターは、モンゴルの市場経済を担う人材の育成を目的として、日本の政府開発援助（無償資金協力）により、モンゴル教育省及びモンゴル国立大学との協力の下、2002年6月に設立された施設である。
- (6) 2018年1月のJICA精算レートは1トゥグルグ=0.046760円。10,000トゥグルグは約467.6円である。

#### 【引用文献】

- (1) 外務省(2017) 海外在留邦人数調査統計表一覧  
<[http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/page22\\_000043.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/page22_000043.html)>(2018年1月26日)
- (2) 外務省(1998) 平成10年(1998年)速報版(平成9年10月1日現在) 海外在留邦人数統計(1998年度版)>II国(地域)別在留邦人の概要>1)アジア  
<[https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/98/2\\_1.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/98/2_1.html)>(2018年1月26日)
- (3) 外務省領事局政策課(2008) 海外在留邦人数調査統計 平成20年速報版(平成19年10月1日現在) p.34  
<<https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/08/pdfs/1.pdf>>(2018年1月26日)
- (4) 外務省領事局政策課(2018) 海外在留邦人数調査統計 平成30年要約版(平成29年(2017年)10月1日現在) 閲覧用(PDF) p.76  
<<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000368753.pdf>>(2018年1月26日)
- (5) 国際交流基金(2016) 2015年度日本語教育機関調査結果(モンゴル)  
<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2016/mongolia.html#K E K K A>>(2018年1月26日)
- (6) 法務省(2017) 在留外国人統計(旧登録外国人統計) 統計表, 2017年6月末  
<[http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei\\_ichiran\\_touroku.html](http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html)>(2018年1月26日)

(伊藤一名 古屋大学日本法教育研究センター 八尾一 モンゴル日本人材開発センター)